アンテミオン奉納の肖像と馬像（Aristot. Ath. Pol. 7. 4）について

――前6-4世紀のアテナイにおける両親の肖像と家族のための奉納物に基づく再検討――

小松　誠

1．アンテミオン奉納の肖像と馬像に関する先行研究と問題の所在

古代ギリシア世界には様々な都市国家が散在し、それぞれがゼウスなどの神々やヘラクレスといった英雄たちのための聖域を領域内に設けていた。本稿で取り上げる都市国家アテナイのアクロポリスもこうした聖域の一つである（図1）。そこには神殿や英雄廟が建てられ、犠牲を行うための祭壇が設けられた。その周囲には都市国家や市民による数多くの奉納物が建立された。一般的に、奉納物は奉納品である彫像や石碑等とそれを支える台座から構成される。この台座には、奉納者、奉納理由、時には奉納物の制作者の名前が銘文として刻まれた。こうした奉納物は神々や英雄による恩恵への感謝のしるしであると同時に奉納者の名誉を知らせる手段となったともみられる[1]。

アクロポリスにアンテミオンが設置した肖像と馬像もこうした奉納物の一つである。この奉納物は文献によってのみ知られ、像やその台座は失われている。この奉納物についての文献上の記述を巡っては様々な問題が残されているように思われる。

この肖像と馬像については伝アリストテレスの『アテナイ人の国制』とそれを基にしたとみられる後2/3世紀に活動したイウリオス・ポリュデウスケスが編纂した『オノマスティコン』に記述がある。このオノマスティコンとは「語彙辞典」というほどの意味である。

とりわけ、『アテナイ人の国制』にはアンテミオンの奉納物は馬像と肖像であると記されており、そこに刻まれていたという銘文が引用されている[2]。

> ἔδει δὲ τελεῖν πεντακοσιομέδιμνον μὲν ὃς ἂν ἐκ τῆς οἰκείας ποιῇ πεντακόσια μέτρα τὰ συνάμφω ξηρὰ καὶ ὑγρά, ἱππάδα δὲ τοὺς τριακόσια ποιοῦντας, ὡς δ᾽ ἔνιοί φασι τοὺς ἱπποτροφεῖν δυναμένους. σημεῖον δὲ φέρουσι τό τε ὄνομα τοῦ τέλους, ὡς ἂν ἀπὸ τοῦ πράγματος κείμενον, καὶ τὰ ἀναθήματα τῶν ἀρχαίων· ἀνάκειται γὰρ ἐν ἀκροπόλει εἰκὼν {Διφίλου}, ἐφ᾽ ᾗ ἐπιγέγραπται τάδε·
>
> Διφίλου Ἀνθεμίων τήνδ᾽ ἀνέθηκε θεοῖς,
> θητικοῦ ἀντὶ τέλους ἱππάδ᾽ ἀμειψάμενος.
>
> καὶ παρέστηκεν ἵππος ἐκμαρτυρῶν, ὡς τὴν ἱππάδα τοῦτο σημαίνουσαν. οὐ μὴν ἀλλ᾽ εὐλογώτερον τοῖς μέτροις διῃρῆσθαι, καθάπερ τοὺς πεντακοσιομεδίμνους. ζευγίσιον δὲ τελεῖν τοὺς διακόσια τὰ συνάμφω ποιοῦντας· τοὺς δ᾽ ἄλλους θητικόν, οὐδεμιᾶς μετέχοντας ἀρχῆς. διὸ καὶ νῦν ἐπειδὰν ἔρηται τὸν μέλλοντα κληροῦσθαί τιν᾽ ἀρχήν, ποῖον τέλος τελεῖ, οὐδ᾽ ἂν εἷς εἴποι θητικόν.

「誰でもその土地財産から乾量・液量あわせて五〇〇単位を生産する者は五〇〇石級に属する定めであり、また三〇〇単位を生産する者は騎士級に所属した。しかしこれは馬を飼育できた人々のことだと言う者もあり、その証拠としてこの所得等級の［騎士という］名称をあげ、［馬を養うという］事実からそう命名されたはずだからと主張するのみならず、先祖の奉納品もその証拠だと言う。というのも、アクロポリスにはディフィロスの像が奉納されており、そこには次の碑銘が刻まれているからである。

ディフィロスの子アンテミオンはこれを神々に奉納した。労務者級から騎士級に進級した記念に。

そしてあたかも騎士級とはこれを意味するのだと証言するかのように、かたわらには一頭の馬の像が建っているのである。だがやはり騎士級は五〇〇石同様、その生産物の単位によって区分されたとする方が理にかなっている。また重装歩兵級に所属したのは乾量・液量あわせて二〇〇単位を生産する者であり、それに満たぬ者は労務者級で、これはいかなる役職にもあずからなかった。それゆえ現在でも、抽選で何かの役職に就こうとする者がいかなる等級に属するかと尋ねられて、労務者級と答える者は一人もいないだろう。」

2行の銘文の引用の直前に、アクロポリスに奉納されたのはアンテミオンの父「ディフィロスの像 (εἰκὼν {Διφίλου})」とする記述がある。F. G. Kenyon は自著において A. S. Murray のこの2語に関する意見を説明している[3]。そこでは、労務者級から騎士級に進級したのはアンテミオンで、その父の肖像が騎士級を暗示する馬像とともに奉納されるというのは考えにくいこと、騎士級へと進級したのはアンテミオンであるから肖像はその父ではなく彼自身を表していたと考えられること、そしてこれらの点から、「ディフィロスの像 (εἰκὼν {Διφίλου})」という記述はこの書物の執筆者か写本を作成した写字生のどちらかによる誤りで、「ディフィロスの ({Διφίλου}) は本文から除くべきであるということが指摘されている。この意見について Kenyon は自身の見解を述べないが、J. E. Sandys、P. Rhodes、村川堅太郎氏、それに橋場弦氏らもこの見解を支持しており、Rhodes は肖像がアンテミオンを表していたとする Murray の解釈は「実際のところ一般に受け入れられている」とまで述べている[4]。先行研究は、いずれもアクロポリスに彼が自身の肖像と馬像を奉納したとする点で見解が一致している。

これまでの見解とは異なり、この論考では、アンテミオンが奉納した肖像はディフィロスを表していたと考えられる点とそもそも（騎士級を暗示するとされる）馬像

と肖像は別個に奉納されたとする推論を検討してみたい。もしこの推論が妥当であると言えるとすれば、『アテナイ人の国制』中の「ディフィロスの像」という記述から「ディフィロスの」を削除しなくてもよいのではないかと思われる。

この推論を巡り、本稿では、アンテミオンが建立したという肖像と馬像に関して、その制作年代、そもそも両像は実際に同一人物が同時期に建立した一つの奉納物として考えられるのか、そしてこの肖像は誰を表していたのかという３点を検討したい。この彼の奉納物の検討をきっかけとして、古代アテナイが奉納という行為において親子・家族関係をどのように把握し、また表現しようとしていたのかについても考えたい。そのため、前6-4世紀にアテナイの聖域に子によって建立された両親の肖像・肖像画と家族のための奉納物について類例を挙げて論じる。

２．アンテミオン奉納の肖像と馬像をめぐる『アテナイ人の国制』と『オノマスティコン』の記述について

第１章アンテミオン奉納の肖像と馬像を巡る『アテナイ人の国制』の記述を引用し、本稿で取り上げる問題点について述べた。ここでは、引き続き同書の記述を踏まえて、アンテミオンによる奉納物の制作年代とその銘文について、先行研究に言及しつつ説明する。その後に、同書に基づいて彼の奉納物に言及する『オノマスティコン』の記述にも目を向けたい。アンテミオンの奉納物をめぐる両者の記述には、若干の違いがあり、それについて検討する。

アンテミオンの奉納物は、漠然とペルシア軍によるアクロポリス破壊がおきた前480/79年以降に年代づけられてきた[5]。さらに、アンテミオンは前５世紀末期に活動した政治家アニュトスの父親とみる意見もある[6]。

肖像と馬像を巡る上述の３点とは別に、アンテミオンの奉納物の銘文の記述と建立場所に関する議論についても言及したい。両書とも肖像と馬像の奉納場所はアクロポリスであり、奉納物の２行の銘文を伝えている。銘文は２行ともペンタメトロスで書かれている。一般的にペンタメトロスはヘクサメトロスと併せて２行を１組とする詩型で用いられるため、この銘文については疑問が投げかけられてきた。議論が非常に煩雑なのでここでは省略するが、結論として、L. Jeffery、G. De. Ste. Croix、そしてC. Keeslingはいわゆるアンテミオンの肖像彫刻が実際に存在したであろうことは疑いを容れないとしながらも、この２行からなる銘文の１行目と２行目はそれぞれ別の出典から引用されたと論じる[7]。すなわち、１行目の「ディピロスの子アンテミオンはこれを神々に奉納した。(Διφίλου Ἀνθεμίων τήνδ᾽ ἀνέθηκε θεοῖς)」については、アンテミオンの奉納物の銘文の原文とみなす。だが、２行目の「労務者級から騎士級に進級した記念に (θητικοῦ ἀντὶ τέλους ἱππάδ᾽ ἀμειψάμενος.)」は、この書物の執筆者か後代の写字生によって挿入されたこの奉納物への注釈であって、本来この銘文の一部ではないという。

１行目では、また別の点が問題となる。すなわち、同行に、奉納物は「神々に (θεοῖς)」捧げられると記されている点である。RhodesやKeeslingが述べるように、「神々に」奉納物を捧げるという銘文はアルカイック時代からクラシック時代のアクロポリスでは知られない[8]。この時代のアクロポリスは女神アテナの聖域であることから、女神アテナに奉納品を建立するというのが一般的である。従って、アンテミオンの奉納物はアクロポリス以外の聖域に建立されたと想定する意見もある。ただ、奉納場所を巡ってはこの銘文以外の手がかりは乏しいため、本稿では建立場所に関する議論には立ち入らない。

ここまで見てきた『アテナイ人の国制』の記述を基にしたと考えられる、以下のような記述が、『オノマスティコン』にみられる[9]。

> Ἀνθεμίων δὲ ὁ Διφίλου καλλωπίζεται δι᾽ ἐπιγράμματος ὅτι ἀπὸ τοῦ θητικοῦ τέλους εἰς τὴν ἱππάδα μετέστη, καὶ εἰκὼν ἔστιν ἐν ἀκροπόλει ἵππος ἀνδρὶ παρεστηκώς· καὶ τὸ ἐπίγραμμα.
>
> Διφίλου Ἀνθεμίων τόνδ᾽ ἵππον ἀνέθηκεν θεοῖς,
> Θητικοῦ ἀντὶ τέλος ἱππάδ᾽ ἀμειψάμενος.
>
> 「またディフィロスの子アンテミオンは碑銘を通じて労務者級から騎士級にかわったことを自慢する。そして像がアクロポリスにあって（それは）男性の傍に立つ馬である。そしてその碑銘は（以下の通り）。
>
> ディフィロスの子アンテミオンはこの馬を神々に奉納した。
> 労務者級から騎士級に進級した記念に。」

この記述と『アテナイ人の国制』の記述の最大の相違点は、両者が引用するアンテミオンの奉納物の銘文の１行目である。同書では、銘文の１行目は人物の像をさして「これを (τήνδ᾽)」奉納したと述べる。『オノマスティコン』ではアンテミオンの奉納物は「この馬 (τόνδ᾽ ἵππον)」であるとされる。『アテナイ人の国制』が伝える「２行の銘文」が実際にアンテミオンの奉納物の台座に刻まれていたのだろうとする立場を取りつつもKenyonは、両書が伝える銘文の１行目の違いは、『オノマスティコン』において「馬を (ἵππον)」という行間註が

銘文の１行目に誤って挿入されたことによって生じたのだろうと述べる[10]。

３．アンテミオンの奉納物の銘文１行目と前 320 年以前のアテナイの聖域に建立された肖像の銘文

第３章では、はじめに前５世紀以前とそれ以後の肖像に刻まれた銘文の文型の一般的な違いについて述べる。後半では、この文型に着目してアンテミオンの奉納物の銘文１行目を再検討したい。この検討を通じて、彼が奉納したとされる肖像と馬像はそれぞれ別の奉納者によって奉納された可能性が浮かび上がってくるように思われる。また、アンテミオンの肖像の制作年代をより正確に決定できるように思われる。

前５世紀末までアテナイの肖像の銘文では、奉納物が肖像である旨が明示された事例は知られない[11]。前４世紀に入ると銘文に奉納品が肖像である旨を書く場合と書かない場合の両方が確認される[12]。つまり従来は銘文には「X は奉納した」と書かれるのが一般的であったが、「X が Y を奉納した」とする事例が出現する。前３世紀には、「X は奉納した」と記す事例はみられなくなる。

例えば前 390-370 年頃にコノンとティモテオスが個人でアクロポリスに奉納した彼らの肖像の台座の銘文では奉納物が肖像であることは示されない[13]。

逆にポリュストラトスは死亡した兄弟ポリュロスの像を前４世紀前半にアクロポリスへ奉納したが、その銘文には「この肖像を (εἰκόνα τήνδ’)」捧げたとある。また次章で取り上げるイソクラテスとニコクレスの肖像など計５点の銘文にも同様の文言がある[14]。この文言が刻まれた肖像はそれ以外に何も伴わない単体の奉納物として建立されている。

前章でも述べた通り、『アテナイ人の国制』に引用されるアンテミオンの銘文の１行目では、「これを (τήνδε)」奉納したとある。この銘文では「肖像 (εἰκόνα)」という名詞が省略されていると考えられてきた[15]。但し、同行の「これを (τήνδ’)」という一語から、アテナイ人は奉納物が肖像であることを容易に推測できただろう。いずれにせよ、アンテミオンの奉納物の銘文の文型は「X が Y を奉納した」という、より新しい文型に属することがわかる。

この点から、２つの点が浮かび上がってくるように思われる。初めにアンテミオンの奉納の肖像の制作年代について述べる。上述の通り、前４世紀の初頭になると肖像が奉納された旨を銘文が示すようになるため、この肖像は前４世紀初頭から『アテナイ人の国制』が成立した前 330-320 年頃の間に年代づけられるように思われる。

２つ目は、アンテミオンが肖像だけを建立していたと考えられる点である。既述の通り、この銘文の１行目は奉納物が肖像であることを明示しているように思われる。先に言及した銘文が奉納品は肖像であることを明示する５例では、いずれも肖像が単体で奉納された。それ故、アンテミオンの銘文１行目は奉納物が馬像を含まない単体の肖像であることを示していると考えられる。つまり、肖像と馬像はそれぞれ別の時期に異なる奉納者によって建立されたことが想定されるだろう。もし、『アテナイ人の国制』の通りに馬像が肖像の傍らに立っていたというならば、アンテミオンが肖像を建立した後に馬像が付け加えられたか、逆に馬像の傍らに彼が肖像を建立したのではないだろうか。第５章で述べるように、当時のアテナイでは同じ市区の住民同士や家族共同で奉納物を建立する事例は数多く知られる。その中には、もともとある市民が建立した奉納物に、その家族などが新たな奉納物を付け加えた事例も確認される[16]。

４．前 6–4 世紀のアテナイの聖域に子が奉納した両親の肖像・肖像画

これまで前 6-4 世紀のアテナイの肖像の銘文の文型を見てきた。第４・５章では、アンテミオンの奉納物に関する３つの点のうち残り１つ、つまりアンテミオンが自身の肖像を建立していたのか否かという問題に関連して、アテナイの聖域に子が奉納した両親の肖像・肖像画及び親子に関係する奉納物を検討する。

第４章では子が奉納した両親の肖像もしくは具体的な証拠に基づいてそのように推定される 14 例のうち代表的な６例を取り上げる[17]。

１つ目は、現存する最古の作例で前 510 年頃にアクロポリスにアルキマコスが奉納した父カイリオンのものとされる大理石像である[18]（図２）。カイリオンはアクロポリスに祭壇を奉納しており、その銘文から聖財管理官を務めたことが知られる[19]。大理石像は椅子に腰掛けてタブレットを持つ男性の姿を表す。ものを書き留めるタブレットを持つ姿が公職者を想起させることから、この大理石像は以下の銘文を持つ円柱状の台座と組み合わされてきた。

「アルキマコスはゼウスの娘にこのアガルマを誓いのとおり捧げた。彼は貴い父カイリオンの息子であることを誇りとする。」

銘文では、奉納物はアガルマと説明されている。このアガルマとは小さな陶器から高価なブロンズの彫像に至るまで様々な神への悦ばしき捧げ物を意味する[20]。だが、この銘文では奉納物の種類は示されない。

２つ目は、将軍テミストクレスの肖像画である。ペル

シア軍が前480年にアテナイへ侵攻した際に、彼はアテナイ軍を率いて、それを撃退した将軍として名高い。後に、彼は故国を追われて、ペルシア帝国のマグネシアに亡命し、同地で生涯を終えたという[21]。後2世紀の旅行家パウサニアスはアテナイのピラエウスにあった彼の墓について述べる箇所で、アクロポリスのパルテノン神殿の内部に彼の肖像画が奉納されていたと述べている。以下にその記述を引用する[22]。

「私の時でも艇庫は現存していたし、いちばん大きな港の辺りにはテミストクレスの墓がある。実は伝承があって、テミストクレスに加えた仕打ちをアテネ市民たちが後悔したので、彼の親族が遺骨を回収してマグネシアから持ち帰ったとされる。テミストクレスの息子たちも帰国を果たしたのは自明で、彼らはテミストクレスの絵画をパルテノンに奉納している。」

R. Krumeichは彼らのアテナイへの帰還及びこの絵画の奉納はパルテノン神殿の落成から息子たちが死亡するまでのおおよそ前440-400年頃と論じる[23]。ただし、この絵画についてはパウサニアスのこの記述以外からは知られず、現存もしないため、テミストクレスがどのような姿で表されていたのかは知られない。

3つ目はレウコニオン市区出身でムネソンの息子グナティオスとトラシュロスが奉納した彫像である[24]。この奉納物についても銘文つきの台座のみが現存する。台座の上にはブロンズ像を設置するためのダボ穴が2つ残されており、ここから彫像が両足を開いて立っていたと考えられる。台座前面には、2つの銘文が刻まれており、1つは前五世紀の奉納の際に刻まれた。

「レウコニオン市区出身のムネソンの息子らトラシュロスとグナティオスがアテナに捧げた。」

彫像が奉納された動機は知られないが、ムネソンの一族は国家の重要な職を歴任したことが知られる[25]。この銘文では、奉納品の種類は示されない。

そしてもう一つの銘文は、この肖像彫刻が後1世紀の執政官ルキウス・アエミリウス・パウッルス(Lucius Aemilius Paullus)の美徳を記念する彼の肖像として再利用されたことを伝える[26]。

ローマ帝政期において、古典時代の奉納彫像の肖像としての再利用は費用の節約や古典時代の名の知れた彫刻家の彫像を用いて特定の人物を顕彰するために行われた。神々や英雄の彫像は皇帝やその親類の肖像として用いられたことが知られる[27]。この執政官は時のローマ皇帝の親類縁者ではないことから、トラシュロスとグナティオスが設置したのは男性の肖像彫刻であったと考えられる[28]。その銘文で二人の兄弟の父ムネソンの名が言及されることから、この肖像は父ムネソンを表していたと考えられてきた[29]。

これらはいずれもアクロポリスの事例である。前4世紀以降はこの丘以外の聖域にも両親の像が市民によって建立されたことが知られる。

4つ目はニコクレスの肖像である。前4世紀中葉に年代づけられる彼の像の台座がサラミス島のアンベラキから出土している[30]。台座には次のような銘文が刻まれている。

「ニコクレス、ヘゲシッポスの息子、アナギュロス市区出身。この父親の肖像をアペモンが不死なる神々に捧げた、(これは)聖なるサラミスを飾る。」

ここでは奉納物が肖像であることが明示される。ニコクレスは前342/41年に公職にあったことが別の史料から知られる。肖像は現存せず、その像容は知られない。

5つ目は、イソクラテスの肖像である。プルタルコスの『十大弁論家列伝』によれば、イソクラテスの義理の息子アパレウスが父の肖像を、ゼウス・オリュンピオスを祀る神殿の近くに前350-325年頃に建立したという[31]。台座と肖像は現存しないが、台座には以下のような銘文が刻まれていたとプルタルコスは伝える[32]。

「イソクラテスの子アファレウスがこれなる像をゼウスに捧げる。神々と［我が］両親の徳とに敬意を表するために。」

なお、パウサニアスもこの神殿のそばにイソクラテスの彫像があったことを記す[33]。

最後の6例目は中心市エレウシニオンに建立された彫像である。奉納者は息子で、父母の像が建立された。台座上部に彫られたダボ穴から、両像は一つの台座の上に設置されたことが窺われる。両像はすでに失われており、以下の銘文つきの台座が残されている[34]。

「フュステウス、デモペイティデスの息子、アカルナイ出身。ペイシクラテイア、ラコンの娘、アカルナイ出身。デモペイティデス、フュステウスの息子、アカルナイ出身が父と母をデメテルとコレーに捧げた。テオクセノス、ボイオティア出身、が作った。」

ここでは奉納物が肖像であるとは明記されないが、それが父母の像であることが窺われる。彫刻家テオクセノスの名はこの銘文以外から知られない。銘文の書体から、これは前4世紀後半に制作されたと考えられる。

以上の作例から、アクロポリスをはじめとするアテナ

イの聖域に、アテナイ人が自らの親の肖像・肖像画を建立する習慣があったことが確認できた。

5．アテナイにおける親子に関係する奉納物

本章ではこの時代にアテナイの聖域に建立された親子に関係する奉納物を検討する。ここでいう親子に関係する奉納物とは、子が親のために建立した奉納物で肖像以外のもの、親が子のために設置した奉納物、そして、親子が連名で建立した奉納物である。Ch. Löhr が前 6–4 世紀のギリシアの聖域に建立された家族に関する奉納物の目録を纏めている。本稿では Löhr の研究に加えて、Raubitschek 及び Keesling らのアクロポリスにおける奉納物研究に基づいて、アテナイの聖域に建立された親子に関係する奉納物に着目したい。

第 4 章では子供が建立した両親の肖像彫刻を見てきた。肖像以外にも子供が親のために建立した奉納物は 3 例確認される [35]。それらはいずれもアクロポリスに前 510-480 年頃に奉納された動物を表すブロンズ像であったと考えられる。現存する限り最も古いのは、アクロポリスから出土したエテアルコスともう一人の奉納者が父親のために建立したものである。Raubitschek によれば、エテアルコスらの奉納物はブロンズの馬の像であったという [36]。これら 3 例は奉納者が神にたてた誓いが成就したことを理由として設置されている。当時のギリシア人は願い出た利益が授けられた場合には神に奉納物を建立するという誓いをしばしばたてた。この誓いは、請願者が果たせない場合にはその親族に受け継がれた [37]。

子が親のために奉納する例とは逆に、親が子のために奉納する場合も前 500 年頃から現存する限りで 18 例確認される [38]。それらの奉納物は前 5 世紀にはアクロポリスに奉納されていたが、前 4 世紀に入るとそれ以外の聖域でも確認される。前 480–70 年頃にミキュテは自分自身と自分の子供のためにたてた誓いを成就するために奉納浮彫を奉納している [39]。

最後に、親子が連名で奉納物を建立する事例が 19 例知られる [40]。前 4 世紀までのそれらの奉納物は大半がアクロポリスに建立されてきた。前 5 世紀末からは前 4 世紀初頭に活躍した将軍コノンはアクロポリスに自らの肖像を個人の負担で建立している。それと同じ台座に前 370 年代に彼の息子ティモテオスも自らの彫像を設置している。

以上から、アテナイの聖域で親が子のために、子が親のために、あるいは親子で奉納をする習慣が確認された。

結びにかえて

アテナイの聖域では少なくとも前 6 世紀後半から両親の像を市民が個人の負担で奉納する事例が知られる。前 5 世紀を通じて、市民が個人で奉納した肖像の台座に刻まれた銘は奉納物が肖像であることを示さないが、前 4 世紀前半から示す事例が確認される。

ここで、アンテミオンの奉納物に話を戻したい。一部の研究者によって、この奉納物はアリストテレスの記述に反して、アクロポリス以外の場所に建立されたとする考えも示されてきた。この他に、初めに述べた 3 つの点がこれまでの研究では見落とされてきたように思われる。

1 つ目は制作年代である。アンテミオンの奉納物は前 4 世紀初頭からこの奉納物に言及する『アテナイ人の国制』が成立した前 330-320 年頃に年代づけることができると思われる。

2 つ目は、『アテナイ人の国制』が引用するこの奉納物の銘文の 1 行目は彼による肖像の建立だけを指し示していると思われる点である。換言すれば、『アテナイ人の国制』と『オノマスティコン』の執筆者たちは、肖像とその傍らに建つ馬像を一つの奉納物とみなすが、これらは別々に建立されたと見なす方が自然と思われる。つまり、『アテナイ人の国制』で述べられるように、アンテミオンの騎士級への進級を馬像が暗示しているとは考え難いように思われる。

3 つ目は、『アテナイ人の国制』におけるアンテミオン奉納の肖像の記述についてである。これまでの研究では、アンテミオンが父親の肖像と馬像を奉納したとする同書の記述に反して、アンテミオンは自身の肖像を建立したとする見解が一般的である。だが、これまでみてきたように、市民が肉親のための肖像を奉納する習慣、自らの家族のための記念品を建立する習慣、家族の構成員が共同で（例えば、父子で）記念品を奉納する習慣が確認される。これらに基づけば、この書物の記述のとおりにアンテミオンは父親の像を奉納したのではないだろうか。つまり、同書における「というのも、アクロポリスにはディフィロスの像が奉納されており」という記述の「ディフィロスの」という一語はこれまで言われてきたように誤って挿入されたものではなく、もとからそのように書かれていたと考えることもできるように思われる。

文献略号

古代文献の略号は DNP III (1997) S. XXII-XLIV; Liddell-Scott-Jones XVI-XLV に基づく。文献略号は、ドイツ考古学研究所 Deutsches Archäologisches Institut の投稿規定に基づく。（https://www.dainst.org/en/publikationen/publizieren-beim-dai/richtlinien）。

Arrington 2015: N. Arrington, Ashes, Images, and Memories. The Presence of the War Dead in Fifth Century Athens (Oxford 2015)

Bethe 1931: E. Bethe (Hrsg.), Pollcis Onomasticon II (Stuttgart 1931)

Blanck 1969: H. Blanck, Wiederverwendung Alter Statuen als Ehrendenkmäler bei Griechen und Römern (Rome 1969)

Brommer 1985: F. Brommer, Die Akropolis von Athen (Darmstadt 1985)

Brouskari 1974: M. Brouskari, The Acropolis Museum A Descriptive Catalogue (Athens 1974)

Brouskari 1997: M. Brouskari, The Monuments of the Acropolis (Athens 1997)

Casson-Brook 1921: S. Casson-D. Brook, Catalogue of the Acropolis Museum Vol. II Sculpture and Architectural Fragments with a Section upon the Terracottas (Cambridge 1921)

Davies 1971: J. Davies, Athenian Propertied Families 600-300 B. C. (Oxford 1971)

Dickins 1912: G. Dickins, Catalogue of the Acropolis Museums Vol. I Archaic Sculpture (Cambridge 1912)

De. Ste. Croix 2001: G. De. Ste. Croix, The Solonian Census Classes and the Qualification for Cavarly and Hoplit Service: in G. de Ste. Corix–R. Parker–D. Harvey (Hrsg.), Athenian Democratic Origins: and the Other Essays (Oxford 2001) 5-72

Dillon 2007: S. Dillon, Ancient Greek Portrait Sculpture Contexts, Subjects, and Styles (Cambridge 2007)

Dillon 2010: S. Dillon, The Female Portrait Statue in the Greek World (Cambridge 2010)

D'Ooge 1908: M. D'Ooge, The Acropolis of Athens (New York 1908)

Economakis 1994: E. Economakis (Hrsg.), Acropolis Restoration The CCAM Interventions (London 1994)

Fittschen 1988: K. Fittschen (Hrsg.), Griechische Porträts (Darmstadt 1988)

Franssen 2011: J. Franssen, Votiv und Representätion: Statuarische Weihungen archaischer Zeit aus Samos und Attika (Heidelberg 2011)

Gauer 1968: W. Gauer, Die griechischen Bildnisse der klassischen Zeit als politische und persönliche Denkmäler, JdI 83, 1968, 110-179

Harrison 1890: J. Harrison, Mythology, and Monuments of Ancient Athens. Being a translation of a portion "Attica" of Pausanias by M. De G. Verrall with introductory Essay and Archaeological Commentary by J. E. Harrison (London 1890)

Hoepfner 1997: W. Hoepfner (Hrsg.), Kult und Kultbauten auf der Akropolis, Kolloquium Berlin (1997)

von den Hoff 1994: R. von den Hoff, Philosophenporträts des Früh- und Hochhellenismus (München 1994)

von den Hoff 2008: R. von den Hoff, Images and Prestige of Cult Personnel in Athens between the Sixth and First Century B. C. E., in: K. Trampedach-B. Dignas (Hrsg.): Practitioners of the Divine: Greek Priests and Religious Officials from Homer to Heliodorus, Kolloquium Washington D. C. 2004 (Washington 2008) 107-141

von den Hoff 2019: R. von den Hoff, Griechische Porträts als kulturelles Phänomen, in: N. Zimmermann-Elsefy-A. Schwarzmaier (Hrsg.), Starke Typen: Griechische Porträts der Antike (Berlin 2019) 11-24

Hurwit 1999: J. Hurwit, The Athenian Acropolis History, Mythology, and Archaeology from the Neolithic Era to the Present (Cambridge 1999)

Keesling 1995: C. Keesling, Monumental Private Votive Dedications on the Athenian Acropolis, ca. 600-400 B. C. Diss. The University of Michigan (Ann Arbor 1995)

Keesling 2003: The Votive Statues of the Athenian Acropolis (Cambridge 2003)

Keesling 2005: C. Keesling, Patrons of Athenian Votive Monuments of the Archaic and Classical Periods: Three Studies, Hesperia 74, 2005, 395-426

Keesling 2007: C. Keesling, Early Hellenistic Portrait Statues on the Athenian Acropolis: Survival, Reuse, Transformation, in: Schulz-von den Hoff 2007, 141-160

Keesling 2015: C. Keesling, Solon's Property Classes on the Athenian Acropolis? A Reconsideration of IG I^3 831 and Ath. Pol. 7. 4, in: K. Daly-L. Riccardi (Hrsg.), Cities Called Athens: Studies Honouring John Mck. Camp II (Lewisburg 2014), 115-135

Keesling 2017: C. Keesling, Early Greek Portraiture Monuments and Histories. (Cambridge 2017)

Kenyon 1892: F. Kenyon, Aristotle on the Constitution of Athens (London 1892)

Kenyon 1912: F. Kenyon, Aristotle on the Athenian Constitution Translated with Introduction and Notes (London 1912)

Kenyon 1920: F. Kenyon, Aristotelis Atheniensium Respublica recognovit brevique adnotatione critica instruxit (Oxford 1920)

Korres 1994: M. Korres, The History if the Acropolis Monuments, in: Economakis 1994, 34-51

Krumeich 1997: R. Krumeich, Bildnisse griechischer Herrscher und Staatsmänner im 5. Jahrhundert v. Chr. (München 1997)

Krumeich 2008: R. Krumeich, Formen der statuarischen Repräsentation römischer Honoranden auf der Akropolis von Athen im späten Hellenismus und in der frühen Kaiserzeit, in: S. Vlizos (Hrsg.), Athens During the Roman Period: Recent Discoveries, New Evidence, MusBenaki Suppl. 4 (Athens 2008) 353-370

Krumeich-Witschel 2010a: R. Krumeich-C. Witschel (Hrsg.), Die Akropolis von Athen im Hellenismus und in der römischen Kaiserzeit (Wiesbaden 2010)

Krumeich-Witschel 2010b: R. Krumeich-C. Witschel, Die Akropolis als Zentrales Heiligtum und Ort athenische Identitätsbildung, in: Krumeich-Witschel 2010a, 1-53

Krumeich 2010: Vor Klassischen Hintergrund. Zum Phänomen der

Wiederverwendung älterer Statuen auf der Athener Akropolis als Ehrenstatuen für Römer, in: Krumeich-Witschel 2010a, 329-398

Krumeich 2011: R. Krumeich, Vom Krieger zum Konsul. Zwei frühklassische Weihgeschenke auf der Akropolis zu Athen und ihre Weiterverwendung in der frühen Kaiserzeit, in: O. Piltz–M. Vonderstein (Hrsg.), KERAUNIA Beiträge zu Mythos, Kult und Heiligtum in der Antike (Berlin 2011) 87-104

Löhr 2000: C. Löhr, Griechische Familienweihungen: Untersuchungen einer Repräsentationsform von ihren Anfängen bis zum Ende des 4. Jhr. V. Chr. (Rahden 2000)

Ma 2013: J. Ma, Statues and Cities. Honorific Portraits and Civic Identity in the Hellenistic World (Oxford 2013)

Meritt 1957: B. Meritt, Greek Inscriptions, Hesperia 26, 1957, 198-221

Muss-Schubert 1988: U. Muss-C. Schubert, Die Akropolis von Athen (Graz 1988)

Payne 1951: H. Payne, Archaic Marble Sculpture from the Acropolis; a Photographic Catalogue (New York 1951)

Queyrel-von den Hoff 2019: F. Queyrel-R. von den Hoff (Hrsg.), Das Leben griechischer Porträts Porträtstatuen des 5. Bis 1. Jh. v. Chr: Bildnispraktiken und Neu-Kontextualisierungen (Paris 2019)

Raubitschek 1943: A. Raubitschek, Early Attic Votive Monuments, BSA 40, 1943, 17-37

Raubitschek 1949: A. Raubitschek, Dedications from the Athenian Akropolis (Athens 1949)

Rhodes 1993: P. Rhodes, A Commentary on the Aristotelian Athenaion Politeia (Oxford 1993)

Rhodes 2017: P. Rhodes, The Athenian Constitution written in the school of Aristotle with an introduction, translation and note (Liverpool 2017)

Ridgway 1971: B. Ridgway, The Severe Style in Greek Sculpture (Princeton 1971)

Rouse 1902: W. Rouse, Greek votive offerings: An Essay in the Greek Religion (Cambridge 1902)

Sandys 1893: J. Sandys, Aristotle's Constitution of Athens: A Revised Text with an Introduction Critical and Explanatory Notes, Testimonia and Indices[1] (London 1893)

Sandys 1912: J. Sandys, Aristotle's Constitution of Athens: A Revised Text with an Introduction Critical and Explanatory Notes, Testimonia and Indices[2] (London 1912)

Schäfer 1997: A. Schäfer, Unterhaltung beim griechischen Symposion: Darbietungen, Spiele und Wettkämpfe von homerischer bis in spätklassische Zeit (Mainz 1997)

Schede 1922: M. Schede, Die Burg von Athen (Berlin 1922)

Schneider-Höcker 2001: L. Schneider – C. Höcker, Die Akropolis von Athen (Darmstadt 2001)

Schrader 1909: H. Schrader, Archaische Mamor-Skulpturen im Akropolis-Museum zu Athen (Brünn 1909)

Schrader 1939: H. Schrader (Hrsg.), Die archaischen Marmorbildwerke der Akropolis (Frankfurt am Main 1939)

Scholl 2006: A. Scholl, ΑΝΑΘΗΜΑΤΑ ΤΩΝ ΑΡΧΑΙΩΝ: Die Akropolisvotive aus dem 8. bis frühen 6. Jahrhundert v. Chr. und die Staatswerdung Athens. JdI 121, 2006, 1-173

Scholl 2010: A. Scholl, Pausanias und die vorpersische Akroppolisvotive, in: Krumeich-Witschel 2010a, 251-270

Schulz-von den Hoff 2007: P. Schulz-R. von den Hoff (Hrsg.), Early Hellenistic Portraiture Image, Style, Context (Cambridge 2007)

Shapiro 2001: A. Shapiro, Zum Wandel der attischen Gesellschaft nach den Perserkriegen im Spiegel der Akropolis-Weihungen, in: D. Papenfuß u. a. (Hrsg.), Gab es das Griechische Wunder?: Griechenland zwischen dem Ende des 6. und der Mitte des 5. Jahrhunderts v. Chr. (Mainz 2001) 91-100

Shear 1937: T. Shear, The Campaign of 1938. Hesperia 8, 1937, 207-246

Stewart 2008: A. Stewart, The Persian and Carthagian Invasions of 480 B.C.E. and the beginning of the Classical Style: Part 1, the Stratigraphy, Chronology, and Significance of the Acropolis Deposits. AJA 112, 2008, 377-412

Trianti 1994: I. Trianti, Παρατηρήσεις σε δύο ομάδες γραπτώς του Τέλους του 6ου αιώνα την Ακρόπολη, in: Coulson W. et. al (Hrsg.), The Archaeology of Athens and Attica under the Democracy. Oxbow Monograph 37 (Oxford 1994) 83-91

Tournikiotis 1994: P. Tournikiotis (Hrsg.), The Parthenon and its Impact in Modern Times (Athens 1994)

伊藤 2013: プルタルコス『モラリア（10）』伊藤照夫訳，京都大学出版会，2013

國方-橋場 2014: アリストテレス『アリストテレス全集19』國方栄二・橋場弦訳，岩波書店，2014

小松 2020: 小松誠「《アキレウスとアイアスの将棋対決を表す群像彫刻》について—アテナイ、アクロポリスの奉納文化に基づく分析—」『美術史』第189冊，2020，1-14

周藤 2013: 周藤芳幸「コノンの像：古典期アテネにおける彫像習慣の一考察」『史学雑誌』第61巻，2013，36-47

橋本 2006: 橋本資久「ヘレニズム時代初頭アテーナイの顕彰制度の変容：megistai timaiをめぐって」『史学雑誌』第115巻，2006，1701-1723

馬場 1991: パウサニアス『ギリシア案内記（上）』馬場恵二訳，岩波書店，1991

村川 1980: アリストテレス『アテナイ人の国制』村川堅太郎訳，岩波書店，1980

師尾 2009: 師尾晶子「古代ギリシアの石碑—関係性の記録と記憶の共有」『歴史学研究』第859巻，144-152

師尾 2011: 師尾晶子「決議碑文の建立の場としてのアクロポリスの成立」長田年弘編『パルテノン神殿の造営目的に関する美術史的研究—アジアの視座から見たギリシア美術（平

成19－21年度科学研究費補助金基盤研究）研究成果報告書』，150-156

註

（1）Rouse 1902; 師尾 2009, 146; 師尾 2011, 152.
アテナイのアクロポリスについて: Harrison 1890; D'Ooge 1908; Brommer 1985; Muss-Schubert 1988; Economakis 1994; Tournikiotis 1994; Brouskari 1997; Hoepfner 1997; Hurwit 1999; Schneider-Höcker 2001; Holtzmann 2003; Meyer 2017.
アルカイック時代からヘレニズム時代のアクロポリスの奉納物について: Schrader 1909; Dickins 1912; Casson-Brook 1921; Schrader 1939; Raubitschek 1949; Payne 1951; Brouskari 1974; Keesling 1995; Brouskari 1997; Shapiro 2001; Keesling 2003; Scholl 2006; Keesling 2007; von den Hoff 2008; Stewart 2008; Krumeich-Witschel 2010a; Scholl 2010; Franssen 2011; Keesling 2017; Adornato 2020.
アルカイック時代末期からヘレニズム時代のアテナイ人の肖像とその建立習慣について: Gauer 1968; Fittschen 1988; von den Hoff 1994; Ioakimidou 1997; Krumeich 1997; Keesling 2003; Dillon 2006; 橋本 2006; Schuluz-von den Hoff 2007; Dillon 2010; Krumeich-Witschel 2010a; Ma 2013; 周 藤 2013; Keesling 2017; Queyrel-von den Hoff 2019; von den Hoff 2019.

（2）Aristot. Ath. Pol. 7. 4; Rhodes 1993, 143-145; 橋場－國方 2014, 24-27 Anm. 9; Rhodes 2017, 204-205. なお、本文における引用は橋場弦訳。ただし、筆者が一部の訳を改めた。本稿で引用する古文献や肖像の銘文の邦訳は、翻訳者を明示している場合を除き、筆者自身による試訳である。なお、『アテナイ人の国制』のテキストはRhodes 2017を用いた。

（3）Kenyon 1892, 24-25 Z. 26.

（4）Kenyon 1892, 24-25 Z. 26; Sandy 1891[1], 28; 1912, 12 Anm. 1; Sandys 1912[2], 28-29; 村 川 1980, 23-24 Anm. 16; Rhodes 1993, 143-144; 國方－橋場 2014, 24-27 Anm. 9; Rhodes 2017, 204-205.

（5）Raubitschek, 1949, 206.

（6）Raubitschek 1949, 206; Davies 1971, 40. アニュトスについて: RE I (1894) 2655-2656 Nr. 2. s. v. Anytos (W. Judeich); DNP I (1996) 820 s. v. Anytos (M. Meier).

（7）de ste Croix 2001, 70-77; Keesling 2015, 125. Vgl. Rhodes 1993, 144-145. Rhodesが引用する未公刊のL. Jefferyの見解も同様である。

（8）Rhodes 1993, 144; Keesling 2015, 123 Anm. 36. Keeslingは「神々に(θεοῖς)」に捧げられた奉納物で、最もアンテミオンの彫像に近いのはデロス島に前4世紀に奉納された奉納物(CEG 2 837)であるとする。

（9）Poll. Onomastikon. 8. 131. テキストはBethe 1931による。イウリオス・ポリュデウケスについて: RE X1 (1918), 773-779 s. v. Iulius (Pollux) (E. Hohl).

（10）Kenyon 1892, 24-25 Z. 26.

（11）Keesling 2003, 180-181.

（12）Keesling 2007, 141-142; Keesling 2017, 43 Anm. 101.

（13）IG II^2 3774: Κόνων Τιμ[ο]θέο Τιμόθεος Κόνω[νος] [ἀνέ]θεσαν.（ティモテオスの息子コノン、コノンの息子ティモテオスが奉納した。（執筆者試訳）; Paus. 1. 24. 3; Krumeich 1997, 212 Anm. 37; Löhr 2000, 75, 76-77. 81. 93. 141. 153. 159. 163. 170. 178. 180. 186. 190. 202. 209. 213-214 Abb. 13 Nr. 86; Keesling 2017, 133-135 Abb. 46.

（14）5点の「この肖像を(εἰκόνα τήνδε)」奉納したと記す肖像の銘文: IG II^2 3830, 3838, 4323, 4368; Plut. Mor. 839b. 尚IG II^2 4335は[τὴν εἰ]κόνα と復元される。

（15）Rhodes 1993, 144; Rhodes 2017, 204-205. 愛媛大学准教授齊藤貴弘先生よりご教示を賜りました。ここに記して、齊藤先生に深甚の謝意を表したい。

（16）市民による奉納物に新たに別の奉納物をその親族が付け加える事例について、Keesling 2005は3例を論文で検討している(IG I^3 695, 699, 950)。但しこうした奉納物の組み合わせは常に家族によって行われたわけではない。

（17）なお残りの8例は次の通り: 1. クサンティッポスの像（Paus. 1. 25. 1）; 2. ディィトレフェスの像 (IG I^3 884; Plin nat. 34. 74; Paus. 1. 23. 3-4); 3. ヘゲロコスの奉納のブロンズ像(IG I^3 850 (CEG I 272)+IG II/III^2 4168); 4. ペリクレスの像(Plut. Per. 3. 3-4; 13. 10; Paus. 1. 25. 1; 1. 28. 2; Plin nat. 34. 74; IG I^3 884); 5. フュステウスとペイシスクラテイアの像(Löhr 2000, 133-134 Kat. Nr. 152); 6. 息子によって建立された父フィロメロスの像(IG II^2 3823); 7. ハプロン奉納の先祖の肖像画 (Plut. mor. 843e. f.); 8. アンティロス奉納の母親レオニケの像 (IG II^2 3839).

（18）Athens, Akropolis Museum Nr. 124, 306, 629 und Paris, Musée du Louvre Nr. Ma 2718; IG I^3 618: Dickins 1912, 165-167; Schrader 1939, 207-209 Nr. 309 Abb. 204 Taf. 132; Raubitschek 1943, 17-18 Abb. 4 Taf. 7; Brouskari 1974, 64 Abb. 112; Trianti 1994; Schäfer 1997, 58-59 Anm. 130; Krumeich 1997, 22-23 Abb. 1-4; Hurwit 1999, 58. 126 Abb. 43; Shapiro 2001, 94-96; Keesling 2003, 182-185. Abb. 58. 210-212; ThesCRA I 2004, 93 Nr. 99 (J. Boardman, T. Manneck, C. Wagner); Franssen 2011, 140. 143 Anm. 27; 169, 173, 174, 175-176, 203, 207, 207, Anm. 545, 208 Anm. 547, 215-217, 253, 254, 282-285, 311-312, 396, 397, 519 Nr. B 178 Taf. 12; Keesling 2017, 121-123 Abb. 37; 小松 2020, 7 Anm. 44.

（19）Raubitschek 1943, 17-18 Abb. 4 Taf. 7; Raubitschek 1949, 10-12 Nr. 6; Brouskari 1974, 52 Abb. 93; Keesling 1995, 128-129, 158-159, 196 Anm. 138; 319, 322-324, 422; Keesling 2003, 182-185; Stewart 2008, 383; 小松 2020, 7 Anm. 44.

（20）Keesling 2003, 10.

（21）テミストクレスについて: Plut. Them; RE V A2 (1934) 1686-1697 Nr. 1. s. v. Themistokles (U. Kahrstedt).

（22）Paus. 1. 2. 1; 馬場 1991, 22-23.; Krumeich 1997, 83-85. 訳は馬場恵二氏による。

（23）Krumeich 1997, 83 Anm. 265.

(24) IG I^3 833+IG II/III^2 4147: Raubitschek 1949, Nr. 112; Blanck 1969, 78-79 Nr. B 27; Löhr 2000, 37 Nr. 39; Keesling 2003, 67. 190. 196; Krumeich 2008, 360-361; Krumeich 2010, 341. 351. Anm. 115. 363. 380-381 Nr. B4 Abb. 13; Arrington 2015, 188-189; Keesling 2017, 125 Anm. 113; 小松 2020, 7 Anm 44.

(25) Keesling 2017, 125 Anm. 125.

(26) IG II/III^2 4147. Krumeich 2010, 341 Anm. 61.

(27) Blanck 1969, 98; Keesling 2003, 187 Anm. 65.

(28) Raubitschek 1949, 117; Blanck 1969 78-79 Nr. B 27; Löhr 2000, 37; Keesling 2003, 190-191; Krumeich 2010, 341; Arrington 2015, 184; Keesling 2017, 125.

(29) Krumeich 2010, 341.

(30) IG II^2 3830; CEG II 767: Rouse 1902, 271 Anm. 18; Davies 1971, 10898; Löhr 2000, 36. 192. 203 Nr. 103; Ma 2013, 198 Anm. 19.

(31) Paus. 1. 18. 8; Plut. Mor. 839b; Rouse 1902, 270; Löhr 2000, 36. 193. 202-203 Nr. 36.

(32) 伊藤 2013, 48: Rouse 1902, 270; Löhr 2000, 36. 193. 202-203 Nr. 36. 訳は伊藤氏による。但し、銘文については訳の一部を改めた。

(33) Paus. 1. 18. 18.

(34) Shear 1939, 207; Meritt 1957, 203-206 Nr. 51 Taf. 51; Löhr 2000, 133-134 Nr. 152.

(35) IG I^3 659, 705, 773.

(36) IG I^3 659. Raubitschek 1949, 251-252 Nr. 221; Löhr 2000, 21-22 Nr. 17.

(37) Keesling 2003, 4-6.

(38) 1. 逸名の奉納者による自身とその息子のためのアンフォラ (IG I^3 573), 2. テオドロスとオネシモスによる奉納物 (IG I^3 699); 3. 逸名の人物とその息子による奉納物 (IG I^3 722); 4. 逸名の奉納者による息子のための奉納物 (IG I^3 735); 5. 逸名の父による娘アリストマケとアルケストラテのための小像 (IG I^3 745); 6. ミキュテによる自身と息子達のための奉納物 (IG I^3 857); 7. ファイディミデスによる息子達と子孫のための奉納物 (IG II^2 4319); 8. 娘デロファネスのために親が建立した医者ファノストラトスの像 (IG II^2 4368); 9. ステリデスによる子供達のための像 (IG II^2 4400); 10. フリュノンによる彼の息子ディオグネトスのための奉納物 (IG II^2 4351); 11. メイディアスとダナイスによる子供達のための奉納物 (IG II^2 4403); 12. ドゥドシオスによる娘のための奉納物 (IG II^2 4412); 13. フィレによる子供ための奉納浮彫 (IG II^2 4588); 14. アルケストラテによる娘のための奉納物 (IG II^2 4593); 15. リュシストラテによる子供達のための奉納物 (IG II^2 4613); 16. ヒッパルケによる自身とその息子のための奉納物 (IG II^2 4883); 17. 父親によって建立された娘アルキッペの像 (IG II^2 4914); 18. 母親によって建立された娘アルキッペの肖像 (Athens, Agora I 4568).

(39) IG I^3 857; Löhr 2000, 44-45 Nr. 46.

(40) 1. 逸名の人物とその息子達による奉納物 (IG I^3 696); 2. スミクロスとその子供達による奉納物 (IG I^3 718); 3. メギュロスとその息子クレメスによる奉納物 (IG I^3 783); 4. 逸名の人物とその息子達による奉納物 (IG I^3 857); 5. 逸名の人物とその息子達による奉納物 (IG I^3 950); 6. ニコストラテとその娘ペンテレイスによる記念物 (IG II^2 1514 Z. 56-58); 7. デメトリオスとその息子達による奉納物 (Athens, NM 1733); 8. 洗濯屋を営む親子とその同僚による奉納浮彫 (IG II^2 2934); 9. コレゴスを務めたティモステネストその息子達による奉納物 (IG II^2 3096); 10. ディオグネトスとその息子ヒュプシノスの肖像 (IG II^2 3205); 11. コノンとその息子ティモテオスの肖像 (IG II^2 3774); 12. ケフィソドトスとその逸名の息子の肖像 (IG II^2 3828); 13. 一族の肖像 (IG II^2 3829); 14. 一家が奉納したアテナ女神像 (IG II^2 4318); 15. アウトフィロス、彼の両親と息子達による奉納物 (IG II^2 4327); 16. 1組の親子を含む仕事の同僚達が連名で奉納した奉納浮彫 (IG II^2 4359); 17. サテュロスとその息子エウクラテスによる奉納物 (IG II^2 4362); 18. ディオニュシオスとその子供達による奉納浮彫 (Athens, Agora I 7396); 19. コレゴスを務めたエルガソスとその息子達が設置した奉納物 (SEG 32, 249).

図版典拠

図 1　Korres 1994, 43 Abb. 1.

図 2　Brouskari 1974, 64 Abb. 112

謝辞

執筆にあたっては筑波大学芸術系教授長田年弘先生にご指導を賜りました。東京大学名誉教授櫻井万理子先生、武蔵野美術大学元教授篠塚千恵子先生、そして千葉商科大学教授師尾晶子先生から貴重なコメント及び助言を頂戴しました。査読者の先生方には拙稿を審査して頂き、見落とされていた大切な点を丁寧に指摘して頂きました。そして、とりわけ愛媛大学准教授齊藤貴弘先生には、本稿全般とイウリオス・ポリュデウケスの『オノマスティコン』のギリシア語とその訳についてご教示頂きました。末筆ながらここに記し、衷心より御礼申し上げます。なお、本稿はJSPS科研費18J21643による研究成果の一部である。

（こまつ　まこと）

図１　《M. Korres によるヘレニズム時代のアクロポリスの再現図》

図２　《カイリオンとされる男性書記座像》
前 520 年頃
ペンテリコン産大理石
高さ 65cm
Athens, Akropolis Museum inv. nos. 124, 306, 629 and
Paris, Musée du Louvre inv. no. Ma 2718.